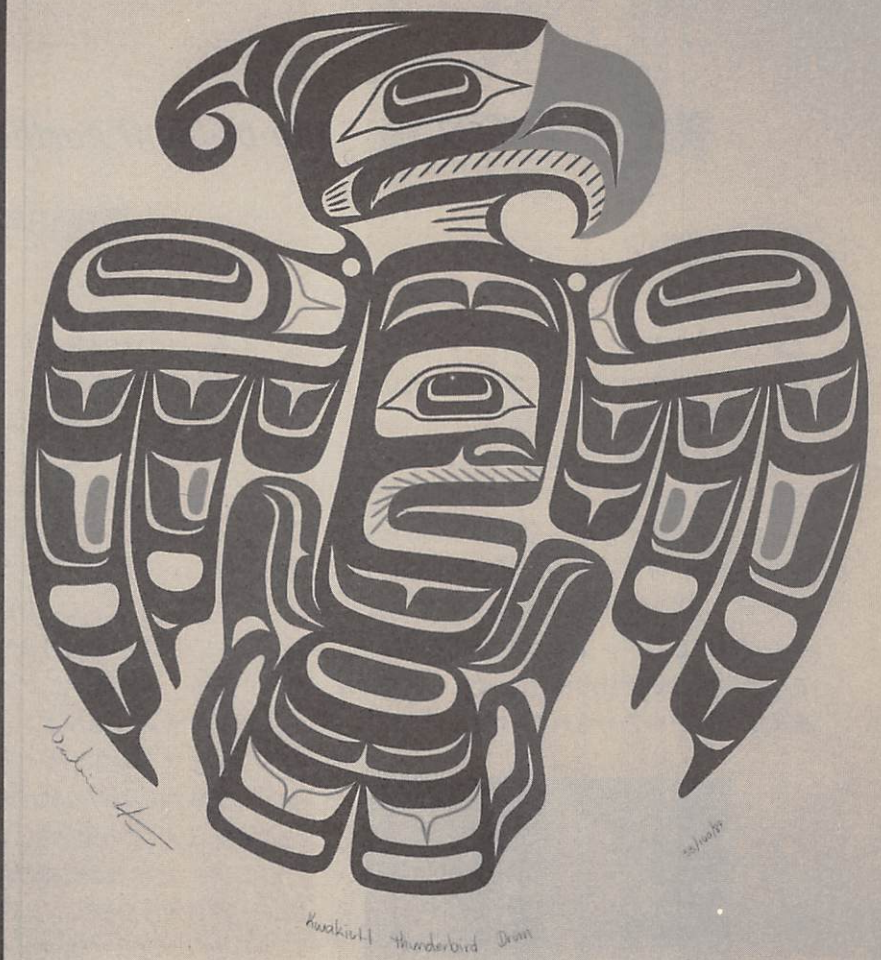




H 1.56.7

シルクスクリーン <サンダーバード・ドラム>

北西海岸インディアン／クワキウトル

Calvin Hunt 作

縦 46.5 cm 横 37.6 cm

特別展 美しき北の文様

— the brilliant northern design —

2

講演会 美しき北の文様

5

講習会 ポンサラニづくり

7

講習会 ウイルタ刺繍入門・アイヌ刺繍入門

8

お知らせ・表紙・記事

9

ニュース

10

美しき北の文様 *the brilliant northern design*

平成13年7月19日～9月26日

北というとなんとか暗いというイメージをもたれることが多いですが、実際には美しい文様がさまざまな表情をみせています。

博物館の展示室では数多くの質問を受けますが、そのなかのひとつに、「この文様にはどのような意味がありますか」というのがあります。質問者は文様には何か意味があると予測しているようです。例えば今回の特別展示のちらし、ポスターに使用したナーナイの花嫁衣装にほどこされる生命の樹とか家族の樹とよばれる文様には、子孫繁栄の願いがこめられています。



特別展ちらし

しかし文様は、そうした個々の要素がもつ意味のほかにも、全体としてももう少し大きな意味がある場合があります。同じ民族内でも、地域によって使われている文様が異なっているところでは、どの地域の出身なのかを示したり、その文様を使える人が限られているところでは、紋章として社会的な地位をあらわしたりすることもありました。また、文様には各民族がさまざまな交流を

行っていた^{こんせき}痕跡をみることもできます。自分達の権利を主張する場で、あるいは民族芸能祭のような自分達の文化を広く伝えたいと思う場で、その民族の特徴的な文様をほどこした衣装が着られることから文様の意味や力を感じることができます。

この他、かつては身の回りの品々にほどこされていた文様が、現在ではそれだけが独立して工芸、美術品となっている例も見られます。

今回の特別展は大きく、1)北欧のサミ、2)北海道からサハリン、アムール流域の諸民族、3)北アメリカ北西海岸インディアン、4)アサバスカインディアンの4つをグループとして、サミでは同じ民族内における地域の差を、北東アジアでは民族をこえ、この地域に共通する文様を、北西海岸インディアンでは文様の社会的な意味を、そしてアサバスカインディアンでは文様の歴史的变化を主なテーマとして構成しました。これは、それぞれのグループで他の要素がないというわけではないことをお断りし、以下に展示の概要をコーナー別に紹介します。



サミ

サミはスウェーデン、フィンランド、ノル

ウェー、ロシアの四カ国に暮らしています。衣服をみるとこの出身かがわかるといわれるほど地域差があらわれています。

白樺細工やトナカイ角細工にほどこされる文様も地域によって違っています。ナイフの柄や白樺製品に象嵌^{そうがん}されるトナカイ角にはナイフの先を使って線刻をし、すずなどを擦り込んで文様がはっきりするようにしています。

すず糸細工^{ししゅう}（刺繡）は南の地方で行われている装飾です。はじめ針金状のすずの棒を、トナカイ角製板にあけられた、大きい穴から順に小さい穴へと通してゆきます。こうすることで細いすず糸ができます。これによって、すず糸細工（刺繡）に用います。

サミのシャマンが予言や占いを行うときに使用した太鼓は、キリスト教の布教とともに、その多くが破壊され、当館で所蔵しているものも復元品です。シャマンは太鼓をたたきながらトランス状態になり、予言や占いを行っていました。太鼓の表面には、様々な文様が描かれていました。また文様の配置は地方によって異なっていました。

1986年に制定されたサミ協議会旗は、サミの服飾に伝統的に用いられてきた赤、青、黄、緑の四色を使ってデザインされています。

北海道・サハリン・アムール流域

北海道からサハリン、アムール流域にかけての地域では、民族をこえてうずまき文様がよく使われています。うずまき文様は衣服や白樺樹皮製品、木製彫刻品などさまざまなものにほどこされています。

うずまき文様それ自体は、世界の各地でみられるものであり、この地域に限られたものではありません。また世界の各地でみられるうずまき文様はすべてがひとつにつながっているわけではなく、例えば自然界にある渦潮や流雲から、それぞれの地域で魅力ある文様として創造されたと考えられます。

それでも、北海道からサハリン、アムールにかけての地域に広がるうずまき文様には、この地域に暮らす民族の交流を感じることができます。一方で、同じようなうずまき文様ですが、丁寧に見

てゆくと、文様のほどこし方や配置に民族の特徴があらわれていることがわかります。

加工がしやすく、手に入りやすい白樺樹皮からはさまざまな容器がつくられていました。白樺樹皮容器には、丸めて作る筒型のものと、折って作る箱型のものがありました。

ウイльтаの場合、まず二つ折り、あるいは四つ折りした白樺樹皮から文様をハサミで切り抜き、次に本体と白樺樹皮製の文様の間に黒や紺といった濃い色の布（赤は使わない）をはさみこみ、^{にかわ}膠ではりつけたり、糸や根で縫いつけたりしていました。裁縫箱として使われた箱^{はた}の蓋の上面や側面、取っ手つき容器の側面上部にほどこされることが多くありました。また白樺樹皮でできた、トナカイの背につける荷物入れや食器入れは、布や皮で覆われてしまうことがあり、この覆いの部分に刺繡がほどこされる場合があります。

ナーナイが白樺樹皮にほどこす文様にもうずまき文様が多くみられます。またナーナイではしばしばうずまきの文様の中に、尾の長い鳥やひし形のつらなりでうろこが示される龍^{りゅう}の姿など、動物の形を見ることがあります。文様の多くは、文様部分を浮き彫りのように、一段高くする（文様を残して樹皮をむく）という手法でほどこされています。このとき文様が黒く染色されていることがあります（はじめに黒く染色した部分をはがすことで、文様部分は黒く、それ以外は白樺樹皮色となる）。黒以外には、赤や青といった色も使われていました。このほかに白樺樹皮を強く押して文様を描くことがあります。



ところでニブフの白樺樹皮製品の文様の特徴は、うずまき文様ではなく、白樺樹皮製品をつなぎあわせる際の根を使った「縫い目」です。縫い目の下には、色づけした樹皮や白樺樹皮以外の樹皮（しばしば白樺樹皮とは違う色をしている）を細く带状にほどこしていることがあります。

衣服、手袋、帽子（頭巾）、靴、手甲といった身につけるもののほか、壁掛けやバッグなど、皮や布でつくられたものにもうずまき文様が多用されています。白樺樹皮製品と同じように、文様をほどこす技法は民族によって異なっています。例えばウイльтаではうずまき文様のアップリケはなく、すべて刺繍であらわしているのに対し、ナーナイではアップリケ、またその反対の切り抜きが行われています。

シャマンは動物の形をした補助霊をもっています。このためシャマンの持ち物には補助霊を象つたものがつけられることがありました。また、動物の形をしたものが、病気治療等に効果があるとされ、お守りにされることもありました。



北西海岸インディアン

北西海岸インディアンの文様には二種類あります。一つはバスケットなどにほどこされる幾何学的な文様です。もう一つは紋章の意味をもつ文様です。紋章の意味をもつ文様は使う人が限定され、その人の社会・政治・経済・儀礼的な特権を示す役割をもっていました。

紋章の役割をもつ文様は、その家系に関する動物などをあらわしていますが、極度に抽象化さ

れているため表現されているものが何なのかを見分けるのが難しい場合があります。

アサバスカインディアン

色とりどりのビーズを使って皮製品の表面に鮮やかな装飾をほどこしたビーズ細工（ビーズワーク）はアサバスカインディアンの代表的な工芸品です。かつては、クイル（ヤマアラシのとげ）を使って装飾を行っていましたが、交易を通じてビーズがもたらされた後、それまでの技術を使って新しい素材・ビーズをとりこみ、現在も価値ある物として作られています。

今回の特別展示用として約15分のビデオを編集しました。これはサミのすず糸刺繍、ナーナイの花嫁衣装、ニブフの文様、ウイльтаの白樺樹皮細工を紹介したものです。

本特別展の開催にあたり、下記の期間、個人から協力をいただきました。記して感謝申し上げます。（順不同）

資料館ジャッカ・ドフニ ペリーベイ調査団
Amur Art Museum 計良智子氏 原ひろ子氏

（学芸課 笹倉いる美）

【訂正】

第16回特別展図録「美しき北の文様」掲載写真が裏焼きでした（33頁写真6）。正しい向きは次のとおりです。



美しき北の文様

平成13年7月28日(土) 13:45~16:30

講師 津田 命子氏 (北海道立ウタリ総合センター学芸員)
大村 敬一氏 (大阪大学助教授)
井上 敏昭氏 (城西国際大学講師)

特別展の関連事業としてアイヌ、北西海岸インディアン、アサバスカインディアンの文様について、3名の研究者をお迎えしご講演いただきました。

津田氏はご自身がお作りになった衣服を示されながら、大村氏は図版を多用され、井上氏が調査地でお集めになった各種ビーズ製品を会場に回覧されながらと、具体的にわかりやすいお話に、聴講者からも多くの質問があり、盛会となりました。

次に各講演の概要を報告します。

※ ※ ※

■津田命子氏「アイヌの文様をめぐって」

(北海道立ウタリ総合センター学芸員)

アイヌの女性たちは、上手下手ということはあっても誰もが自分や家族のために衣服をつくってきた。この衣服には、土台となる衣服の上に、^{しゅう}帯状の布をはって刺繍したものや、衣服に直接刺繍したものなどがある。誰でも製作できるということであるから、評判というものがあるが当然あり、その評価が重要視されていた。

アイヌの女性が衣服を仕立てるためには、物々交換で手にいれた針、糸、小刀などの道具が使われていた。なかで話者は、ハサミに注目している。アイヌの生活や物づくりの道具を知ること、和人の社会に何が流通していたのかを知ることでもあり、アイヌの社会に和人の影響が大きかったことを感じる。

調べをすすめてゆくと、アイヌの生活のなかには、ものさしがなく、またハサミもなかったことがわかってきた。そのような時代に、針と糸、小刀でアイヌの女性たちはどのように衣服を作っていたのだろうか。

ここでアイヌの物づくりを調べるためにアイ



ヌの計測を調べてみた。そうするとアイヌの女性たちが「手ばかり」をしていたことがわかってきた。体に合わせて布を裁ちきり、身体を基準とした計り方をしていた。

アイヌの居住空間には机やテーブルのようなものはなかったため、形を切り出すときには、床や地面において切り抜いていた。また、女性の座り方も裁ち台を必要としないものであった。皮や樹皮の縫い方はアイヌの女性に仕立て方として受け継がれてきた。

文様をつける際には布と布との合わせ目や裾、袖つけなどが重要な目印になっていた。

アイヌ絵からアイヌの衣服に注目してみると、布を貼ってから刺繍をほどこしているものが古くから見られることがわかる。

現代に伝わるアイヌ文様のなかで、リボン状の布を貼り、刺繍を施すという手法の土台は、1720年に『蝦夷志』が著されたころには確立していたと思われる。しかし当時は様々な素材の衣服が作られ利用されていた。江戸時代後期、アイヌの生活のなかに、それまで以上に木綿が流通

するようになり、現在に伝わるようなアイヌの衣服文化が発展、展開したものと思う。

■大村敬一氏「北西沿岸インディアン^①の象徴図像の世界」（大阪大学助教授）



アラスカ州南西部からカナダのブリティッシュ・コロンビア州とアメリカ合衆国を経て、オレゴン州にいたる北米大陸の北西地域には、「北西沿岸インディアン^②」と総称される人々が、サケなどの漁撈^{ぎょうらう}、海獣狩猟、ベリー採集を主な生業として暮らし、また豊かな森林資源利用の文化を築いてきた。

北西沿岸インディアンの芸術には、バスケット等に装飾のためのほどこされる幾何学文様と、象徴図像とよばれるものを見ることができる。

象徴図像は、トーテムポールをはじめとする木彫、仮面、食器、狩猟具や漁具、シダー樹皮とシロイワヤギの毛で編まれた儀礼用のチルクットローブ等にほどこされ、それら道具の所有者のクレスト（紋章）を表示しているが、これは同時に社会・政治・経済・儀礼的特権を示すことでもある。

象徴図像にあらわされているのは、様々な実在上の動物やサンダーパードのような神話上の動物、太陽や月などの自然現象であり、象徴図像の表現には、基本的には、卵型、まぶた型、U字型の三つの要素を組み合わせ、分割表現や同一の身

体部位の反復や流用といった独特な様式が用いられている。このため表現されているものが一体何であるのかを見分けるのが難しい場合もある。このことは、クレストを表示するという象徴図像の役割を考えると矛盾するようであるが、自身の権威をあからさまに表示するのはエレガントではなく、慎み深く洗練された形で表示したいという要求を満たすものである。

19世紀に盛んに使われていた象徴図像は、19世紀後半から20世紀にかけて次第に制作されなくなってゆく。これは北西沿岸インディアン社会の人口の激減と社会の崩壊に加え、アメリカ合衆国とカナダの同化政策が原因である。

しかし1940年代に北西沿岸インディアンの象徴図像が芸術として高い評価を得るようになり、その結果再び盛んに制作されるようになってきている。

■井上敏昭氏「アサバスカン・インディアンのビーズワーク文化」（城西国際大学講師）

アラスカ内陸部からカナダ北西部に住む北アサバスカンと総称される人びとは、ヘラジカやカリブー（野生トナカイ）やウサギ等の陸獣、ガンなどの水鳥を捕獲し、河川や湖沼で漁撈^{ぎょうらう}を行い、ベリー類や草根などの食用植物を利用しながら季節的な移動生活を送っていた。

色とりどりのビーズを使って皮製品の表面に鮮やかな装飾をほどこしたビーズワークは、アラスカ内陸部からカナダ北西部に住む北アサバスカンと総称される人びとの工芸品として代表的なものである。

北アサバスカンにビーズが到来したのは、18世紀のことであり、この意味でビーズワークは外来文化である。しかし、この地域では以前からヤマアラシのとげや動物の毛、デンタリウムシェルとよばれる貝を用いての装飾が行われており、ビーズワークは以前から行ってきた装飾文化に新たな素材・技術として組み込まれたものであるとされている。このためビーズワークは北アサバスカン固有の伝統文化として自他共に認められているのである。

ポンサラニプづくり

講師 津田 命子 氏

(北海道立ウタリ総合センター学芸員)

平成13年7月29日(日) 10:00～14:00



北アサバスカンのひとつグイッチンの間では、ビーズワークは制作者本人が使用するというよりもむしろ、互恵的扶助に基づく社会のなかで、価値ある贈り物として作られ、やりとりされていた。

また、例えば、見事なビーズワークがほどこされた上着は、それを着用する狩人が、その装飾に必要なだけのビーズを交換できるほどの毛皮獣を捕獲したこと、ビーズワークの技術をもつ妻を養っていける食糧も獲得していることなどを示しているように、社会的地位の高さや経済的富裕を誇示するものでもあった。これはもともと互恵的社会であったのが、西洋との接触(毛皮交易)により、個人ごとに代価が支払われるようになったこと、つまり狩人の技能が直接個人の財産に結びつくようになったことを示している。

現在ビーズワークは自分たち独自の文化を再認識し、民族集団への帰属意識を強め、他者との違いを際立たせる機能がある。例えばビーズワークがほどこされた衣服は伝統的民族衣装、すなわち礼服として扱われ、公式の場に招かれる場合には、意識的に着用されることも多い。

北アサバスカン社会において、ビーズワークも含め、伝統的と考えられている事柄は、単に古くから伝えられたものということ以上に、そうすべきもの、そうあるべきものとされている。このため伝統的工芸であるビーズワークに携わる者たちには、文化伝統を継承する先端にいるという自負が感じられるのである。

サラニプはアイヌ語で編み袋のことです(ポンは小さいの意味)。

当館でポンサラニプづくりの講習会を開催するのは平成6年度につづき二回目になります。

前回よりも時間を長く設定し、手に入りやすく初心者でも編みやすいようにと選んだシュロの糸をハサミで切り分けるところからはじめました。

よりあわせることをアイヌ語でカエカといいいますが、まずこのカエカをして取っ手の部分をつくっておきます。次に縦糸6本の中心を三つ編みにして底になる部分をつくります。それから縦糸12本の中心に横糸をかけ、さきほどつくった三つ編みと直角に重ねて、吊りひもでしっかりと結びます。

底かららせん状に編んでゆき、段が増えるごとに、一度に編む縦糸の本数を減らしながら進んでゆくのですが、同じ間隔で、胴の部分を広げず筒型に編んでゆくのが難しいようでした。

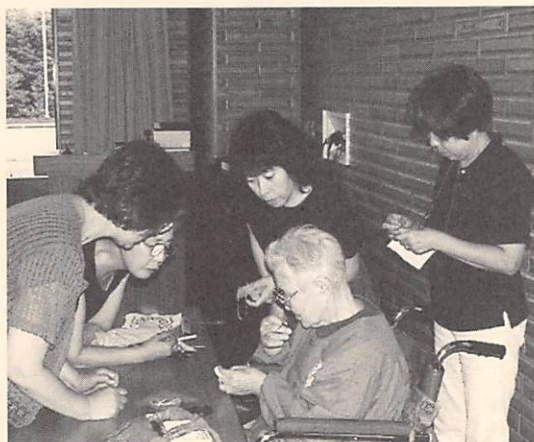
指導経験豊かな講師の説明に、ほとんどの参加者が時間内に完成させることができました。



ウイльта刺繍入門

講師 北川 アイ子 氏
(資料館ジャッカ・ドフニ館長)

平成13年8月22日(水) 13:45～15:30



8 ウイльта^{しゅう}刺繍講習会開催の要望はかねてより多くあり、遠くは神奈川県からの参加者もありました。ウイльта語で文様はイルガといいます。今回の講習会で使用したイルガは講師の作品です。ウイльтаの皮・布製品にはアップリケはなく、文様は刺繍で表されています。中央の太い刺繍と両脇の縁取りという構成がよく見られます。

ウイльтаの人びとは、かつてはトナカイ皮に絹糸で刺繍をしていましたが、今回はフェルトと刺繍糸を使用しました。縁取り用として絹小町糸も用意していたのですが、中央部分をしあげたところで時間切れとなってしまいました。

ウイльта刺繍ははじめてという参加者が多かったため、チェーンステッチを主体とした特徴あるステッチを少し練習をしてから、とりかかりました。

文様を下書きし、しつけをしたところに、刺繍をほどこしてゆきます。

この講習会ではフレップ会(網走のウイльта刺繍サークル)の杉浦むつ子さんと、ウイльта協会の川村信子さんにお手伝いいただきました。

アイヌ刺繍入門

講師 西田 香代子 氏
(北海道ウタリ協会優秀工芸師)

平成13年9月19日(水) 13:45～15:30

9月19日にはアイヌ刺繍^{しゅう}入門を開催しました。

材料は藍染めの布を使い、これに刺繍糸を使って刺繍をしてゆきました。最後に縁をおりまげてコースターにしたてます。

アイヌ刺繍には、さまざまなステッチがありますが今回の講習会では文様部分にはチェーンステッチを、縁取りにはスレデッドランニングステッチのふたつを用いました。

植物のイケマをモチーフにした文様は、まず外側を時計回りに刺繍し、次に内側を逆周りに刺繍してゆきます。

刺繍した文様を美しくみせるには、角でひとつ目を多くして重ねたり、とがった部分を長めにするという、いくつか細かなコツがあり、講師はそうした技術を一人一人に丁寧に指導されていました。

ウイльта刺繍入門とあわせての受講者は二つの刺繍の違いを感じておられたようです。



このほか特別展関連事業として「博物館クラブ 北の文様いろいろ」「講座・特別展『美しき北の文様』解説」「サミのひも織り」を開催しました。

(学芸課 笹倉いる美)

今号の表紙 —シルクスクリーン—

北アメリカの北西海岸インディアンとよばれる人びとの文様には、この写真のようなバスケットなどにほどこされる幾何学的な文様と紋章の意味をもつ文様の二つがあるが、このうち後者は、近年では工芸・芸術品の主題として使われる例がみられる。



H1.54.2 バスケット

シルクスクリーンは1960年代後半から始められた新しい手法で、特にカナダのブリティッシュコロンビア州で多く制作されている。多いもので200～600枚が限定で刷られ、ふつう一枚一枚に作者のサインが入られる。主に販売用や儀式での贈答品として作られる。

紋章はスプーンや船、トーテム・ポールといった、さまざまな形をしたものに文様をほどこす必要から、ほどこされる物にあわせて、文様を変形させるということが行われてきた。変形のひとつに、描こうとするものの特徴を強調するということがある。表紙の写真はワシのうな大きく湾曲したくちばしと、頭のふさから、神話に登場するサンダーバードであることがわかる。

みんぞく こうこ はくぶつかん in 北海道

このコーナーでは当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載します。

- 7/4 (水) 7/20 (金)～7/29 (日)まで、有珠山噴火災害復興イベント「縄文フェスタ」開催、伊達市/D
- 7/5 (木) 腐食が進んだ砂澤ビッキ作の大型木彫「四つの風」の今後を考えるシンポジウム開催、札幌市/D
- 7/29 (日) モヨロ貝塚で半世紀ぶりに試掘調査実施/M
- 7/29 (日) 市民グループ「たきかわチセ・ア・カラの会」が建てていたアイヌ民族の住居「チセ」の本体が完成、滝川市/M
- 8/15 (水) 富山大学とロシア国立サハリン総合大学を中心とした研究チームによって、サハリンと北東日本海域の考古学調査が今年から3年間でられる/D (夕)
- 8/17 (水)、18 (木) 「イタオマチブ復元の旅」連載/AS
- 8/22 (水) ウィルタ協会が北方少数民族戦没者慰霊祭を行う、網走市/A
- 9/3 (月)～9/7 (金) 「礼文島・船泊遺跡 最北の縄文人たち」連載/D (夕)
- 9/4 (火) 紅葉山49号遺跡の縄文時代中期の地層からヒグマの足跡を検出、石狩市/AS

※A：網走新聞 AS：朝日新聞 D：北海道新聞 M：毎日新聞、複数紙掲載の場合は抜粋が大きい方を紹介しています。

共催事業・民博ゼミナール

「海獣狩猟と交易の世界」

現在、大阪の国立民族学博物館で開催されている特別展『ラッコとガラス玉 北太平洋の先住民交易』(平成13年9月20日～平成14年1月15日)に関連して、当館にて北太平洋における海獣狩猟とその毛皮をめぐる交易について、4名の講師をお招きしてご紹介いただきます。

- 基調講演 「北太平洋の先住民交易と海獣狩猟」
大塚和義(国立民族学博物館)
- パネリスト 大島 稔(小樽商科大学)
佐々木 史郎(国立民族学博物館)
渡部 裕(北海道立北方民族博物館)

日時：11月25日(日) 13:00～17:00

会場：北海道立北方民族博物館講堂(無料)

■寄贈資料（7～9月）

- 千葉県森田真旭氏からフィンの弦楽器一点が寄贈されました。
- 小樽市の藤島八也氏から北海道アイヌの木彫レリーフ（男女の横顔）が寄贈されました。
- 網走市の大廣茂氏から北海道アイヌのアツシ織布製小物入れ一点が寄贈されました。
- 東京都の高荷かおる、桐山（黒田）千枝子両氏から蔵書九冊が寄贈されました。

■執筆者・出版者から贈呈を受けた書籍等（7～9月）

- ・北道邦彦 2001『知里幸恵の神謡「ケソラブの神」「丹頂鶴の神」三つの「この砂赤い赤い」』北道邦彦
- ・高木庄治 2001『及川文庫樺太関係書目』高木庄治

■主な来館者

- 9/2（日）
大妻女子大学
教授 服部 旦氏
- 9/18（火）
アイヌ民族博物館
学芸員 児玉 マリ氏
ほか一名
- 9/23（日）
紋別市立郷土博物館
学芸員 佐藤 和利氏
ほか

■行事案内（11～1月）

- 11/3（土・祝）
文化の日特別事業
「北に生きる一民族の映像文化誌一」
- 11/10（土）
博物館クラブ
「北方民族のワナ」
- 11/25（日）
共催事業・民博ゼミナール
「海獣狩猟と交易の世界」
- 12/8（土）
講座「鉤鋏にみる文化交流」
- 12月下旬（予定）
ロビーコンサート
- 1/12（土）
博物館クラブ「かんじきで歩こう」

■その他の行事報告

（7～9月）

- 8/11（土）
博物館クラブ
「北の文様いろいろ」



- 8/12（日）
講座「特別展『美しき北の文様』解説」
- 9/8（土）
講習会「サミのひも織り」

■観覧者動向（7～9月）

	常設展示	特別展
7月	4,866	841
8月	5,903	2,713
9月	4,265	1,799
計	15,034名	5,353名

特別展の観覧者は5,353名でした。

■友の会会員募集中

北方民族博物館友の会会員を募集中です。友の会では季刊誌「Arctic Circle」や「友の会だより」をととして北の文化を紹介しています。年会費は3000円です。すでに会員になられた方は、お知り合いの方にもご紹介下さい。詳しくはお問い合わせ下さい。

■編集後記

最近、「総合的な学習の時間」を今後どのように活用するか、小中高のレベルで模索されており、その選択肢の一つとして当館も利用されています。ありがたいことです。

内容は学校によって様々です。グループごとにテーマを見つけ、事前の打ち合わせから実際の訪問までを生徒自らが行うタイプ、学年全体で当館を見学し、レクチャーを受けるタイプ、何か北方民族にちなんだ「もの」を作るといった体験型のタイプなどが、今までに当館で行われた内容です。

あくまで「総合的な学習」なので、様々なやり方があると思います。学校側と博物館側の双方にとってよりよいものにするためにも、事前打ち合わせの時間を多く持ちたいものです（角）。